

# 医療タイムス

週刊医療界レポート

2015.4/20 No.2204

特集

## 院内アートと庭園療法

やさしい病院環境を求めて



タイムスインタビュー

地域包括ケアシステムの構築は  
電子カルテの情報活用こそが切り札に

メディカル・データ・ビジョン株式会社  
代表取締役社長

岩崎博之氏

タイムスレポート

入間藤沢幸楽園(白報会グループ)  
埼玉県内最大級のサ高住がオープン  
医療法人の運営による24時間サポート体制が実現

Top News

期間別金利を導入 融資条件に優遇措置 2015年度福祉医療機構の貸付事業  
福祉サービス融合で検討チーム 塩崎厚労相

# 冬の時代の診療所経営

## アニマルセラピーの可能性

在宅医療に従事しているが、家に帰ると患者さんがあんなに元気になるのは何故だろう。食欲が出て元気になり笑顔が出ることを「自宅効果」と呼んでいるが、その効果の大きさに驚く毎日だ。よく観察するとペットを飼われている患者さんが多い。そうした患者さんは、ペットと触れ合う環境も大きく作用しているようだ。犬とネコが多いが、鳥や魚もある。訪問したわれわれも動物たちに癒される。患者さんとの時間より、動物との時間のほうが長いこともある。

近くにセラピードックを派遣してくれる団体があったのである認知症の方に依頼してみた。毎週、決まった時間に犬が来てくれるようになって半年後、その人は見違えるように元気になった。うれしいことにデイサービス先にもセラピードックがいるところもある。動物や子どもが、弱った人に与える元気効果は想像以上に大きい。高齢男性は若い女性スタッフが行くだけで喜ぶが、動物はそれ以上の力を持っている。淡路島には、ホースセラピーをやっているところがあり、認知症の人が毎週乗馬すると認知機能が改善するという。全国にはおそらくすごい数のアニマルセラピーが存在するのだろう。がん患者さんは、アニマルセラピーで痛みが和らぐという。おそらく精神的痛みや魂の痛みが和らぐのだろう。もしかしたら肉体的痛みにも効果があるのかもしれない。



下半身動かぬセラピー犬  
シャネル  
～緩和ケア病棟の天使たち～

「下半身動かぬセラピー犬 シャネル  
～緩和ケア病棟の天使たち～」  
(ブックマン社)  
定価1300円+税

アニマルセラピーは、在宅医療の専売特許とは限らない。中医協委員であられた邊見先生がおられた赤穂市民病院では、待合室でセラピードックたちが活躍する映像を見たことがある。外来が引いた昼休みの外来ロビースペースを利用して



医療法人社団裕和会理事長  
長尾クリニック(尼崎市)院長 **長尾 和宏**

1958年香川県生まれ。東京医科大学卒業、医学博士、日本慢性期医療協会理事、日本尊厳死協会副理事長、関西国際大学客員教授、近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」「平穏死という親孝行」など。  
クリニックHP <http://www.nagaoclinic.or.jp>  
長尾和宏オフィシャルサイト <http://www.drnagao.com/index.html>

たが素晴らしいアイデアと実践だと感心した。幸せそうな患者さんの笑顔が忘れられない。

名古屋掖済会病院の緩和ケア病棟には、セラピードックが定期的に来ていて、NPO法人が、大型犬や小型犬を何匹か引き連れて、ロビーで入院患者さんたちを癒していた。その中にひときわ大きい、ゴールドレトリバーがいた。彼女はシャネルという名前のセラピードッグ。といってももとは捨て犬だったという。高齢になったシャネルは、臀部に腫瘍ができて下半身が動かなくなり装具をつけるようになった。そんな身になっても患者さんを癒す仕事を続けるシャネルは、病院だけでなく地域でも有名になった。

私自身もシャネルを見に行った。昼休みの緩和ケア病棟のロビーで、数匹のセラピードックはそれぞれとてもいい仕事をしていて、がん患者さんだけでなく、一般病棟に入院中の認知症の方も癒していた。大きな点滴や酸素吸入や人工呼吸器や鼻から管の入った患者さんも笑顔になっていた。これは本物だ！とあらためて思った。当院所属のカメラマン・国見祐治が撮影した写真集「下半身動かぬセラピー犬 シャネル」(ブックマン社)が、先日、世に出た。不肖、私も解説文を書かせていただいた。写真を見てまた涙がこぼれた。

シャネルのビデオ動画がネットに乗り、現在、世界中で約5万人がありし日のシャネルの映像に癒されている。アニマルセラピーの可能性は大きいと思う。緩和ケアの重要性が叫ばれて30年になるがまだ課題が多い。アニマルセラピーがその突破口になってほしい。